

## 翻 訳

# サムエル・ジョンソンの『彷徨者』(その1)

早 川 勇

### 〈解 題〉

ジョンソンの『<sup>ランブラー</sup>彷徨者』は208のエッセーよりなる。5編を除きジョンソンが書いた。ジョンソンが執筆したもののうち5編を翻訳し、ここに発表したい。『彷徨者』は英国の読み書きができる一般庶民をより教養ある市民にするために書かれた。そのため、ジョンソンはラテン語の難解語を駆使したり、いろいろな修辭的技法もこらした。彼の手法で私が注目すると同時に翻訳が最も困難だった点は、名詞表現の多用である。これを極致まで推し進めたのがジョンソンの『彷徨者』における文章である。

ジョンソンの文体を反映させるためには、日本語訳は美文調であるべきかもしれない。私の翻訳はこの対極にあるが、彼の目指す本質と合致している。翻訳はわかりやすさをモットーとし、難しい漢語を極力避けた。ジョンソンのすべての著作は、18世紀イングランドの啓蒙思想のなかで把握すべきである。ジョンソンの心の奥底にあったものは、より多くの人々に光をあてより明るい場所に導くことである。そこに照準をあてるならば、私の翻訳における読みやすさの追求は妥当性のあるものではなかろうか。

『彷徨者』はジョンソンの著作として重要であるが、これまでほとんど訳されていない。翻訳がきわめて難しいからである。『彷徨者』は英米人にとってすら難解とされるが、そんなエッセーを私のような浅学菲才の言語学者が翻訳しようというのは無謀なことである。恥をさらすことはわかっているが、ジョンソンに心を寄せる者として敢えて翻訳を発表したい。なお、各エッセーの冒頭にある主にギリシャ・ローマの作家たちからの引用文は、出版当初なかったこともあり削除した。原典としては定番の次のものを利用した。

Johnson, Samuel (1969) *The Rambler*. Edited by W. J. Bate and A. B. Strauss. 3 vols. New Haven and London: Yale University Press. Originally published in 1751-1752.

## No. 1

人が世間と交わる際に、いかなる新しい場面でも最初の挨拶のことばは、誰にとっても難しく感じられる。必要から生まれた挨拶の決まった一定の形式がすべての言語に存在することからも、この点が確認できる。ことばを選ぶことが強いられると、人は困惑し判断は鈍ったりしたものだ。そこには、どれが好きだとする誘因などまったくなかったからだ。そこで、何らかの簡単な紹介の方式を作りだしたほうが便利だとわかった。もちろん、目新しさを求めようとする誘惑はあるものの、その方式のほうが古くから続く習慣なので安全である。

著述家たちが大衆の前に現れるに際して、登場におけるこのような儀礼の様式が昔から確立されていることを望まなかったものなどおそらくほとんどいなかっただろう。そういうものがあれば、喜ばせたいと望むことに必ず伴う危険を回避できるだろう。また、謝罪によって強い非難を弱めたり、急な対応で注意を喚起するようなその場しのぎの無駄な便法を考えなくて済むだろう。

叙事詩人たちは詩の冒頭部分を自らの労作にとって単なる付け足しぐらいにしか考えていなかった。彼らはほとんど一致してホーマーの最初の数行を採用した。このため、読者は詩がいかなる形で始まるかを知るためには、その主題を知るだけで充分である。

とはいえ、このように荘厳な詩行を繰り返し用いることは、これまで英雄詩に特有な特徴であった。それがレベルの低い文学にまで合法的に広まることは決してなかった。しかし、それは伝統的な特典とみなされているようで、自分には天才ホーマーに類似する点があるとしてその特典を要求するもののみ享受できることになっている。

この特典はかつて無分別に利用されたのが契機となって、いくつかの規則がホラティウスに対して示された。それらの規則は、並みの名声しか求めないものたちへの指針にとてもうまく合致するかもしれない。人は自分の力で満足させることのできないほど期待を膨らますべきではないが、炎が鎮まり煙となるよりも煙があがり炎となるのを見るほうが楽しいものだ。作家だけでなくすべての人間が、このことを肝に命ずるのは適切かもしれない。

この教えはながいあいだ受け入れられてきた。それは、ホラティウスの権威に対する配慮からであるし、世間の一般的な意見に合致するからである。しかし、自分自身の労作を推奨したからといって、謙虚な態度からはずれると決して考えない人たちも常にいる。また、まぎれもない美点によって、自分だけは一般的な制限から除外され、普通の生活では許されないような高みにまで昇る資格を有していると想像する人たちもこれまでいた。ひよっとしたら、彼らはこう信じていたかもしれない。ツキディデイスと同じように自分

たちが人々に対して「永遠なる財産」を譲渡した際には、そのことに付随して彼らには作品の価値について語るだけの恩典が与えられていると信じていた。

実際、ある状況下においては、低すぎる要求は高すぎる要求と同じくらい危険かもしれない。私たちがしばしば身をまかせる気迫や大胆さには、何か魅力的なものがある。そのことは、抵抗できない力についても同じである。また、あまりにも明らかに自分自身を信頼していないような人間が、他の人間に対して自信をもつように期待することなど当然できない。

プルタークは、他人に自然に怒りを起こさせることなく自らの優秀さを賛美できる各種場面を列挙している。ところが、彼は文筆家が世に出るケースを除外している。その人自身のことば以外にはわからない特質について自画自賛するというのが、一般的な立場のもとでもし理解されないならば、その人はどうしたらいいだろう。具体的には、知り合いがいないとか、自分の能力を実際に発揮する機会にまったく恵まれない場合である。このことが文筆家についても同じくらいあてはまるとはなかなか容認されないだろう。なぜなら、文筆家の場合には、審判の場にあらわれる裁判官を前にして、自分の力量の程度が必然的にあらわになるからだ。しかし、このことは念頭におかなければならない。彼を評価する人たちが彼に好意を多少でももっていない限り、その言い分に耳を傾けるように言いくるめられることはほとんどないだろう。

恋愛において、こころはある種の不安で満ちている。文筆家の心情もそれにとっても近い。こんな格言がいい伝えられてきた。遠回しに気づかれぬように近づかなければ、とてもたやすく成功を勝ち取るなどできない。あなたを愛していますとあまりにも早く告白してしまったら、望みに反して多くの障害を生むことになってしまう。恋に破れて学んだ経験のある人なら、恋心を隠し通して相手の女性がいつか欲しいと望んでいるのが確信できるまで待つだろう。同じやり方が文筆家にもあてはまるならば、時代の厳しきで不平が高じたり気まぐれな批評を受けそれが多くの不満の種となるとしても、この方法で不安を減らすことができるだろう。大衆の好みに気づかれぬように忍び込み、拒否されていないと確信できたときを見計らって、やっと文学的な名誉を勝ち取りたいと人が公表するならば、彼はより大きな望みをもって作家としての人生を歩み始めることになるだろう。駆け出しの作家なら多くの愛顧を獲得することは決してないが、彼が失敗しても軽蔑を招くことはないだろう。

ところが世間では、文筆を<sup>なりわい</sup>生業とする人たちはみな拍手喝采を熱望してやまないと考えている。一部のご婦人たちが、礼儀正しく接する男性はみな愛を求めてくると信じたがつているのと同じである。このため、学識においていかなる努力も怠ると、とめどもなく人々の軽蔑を買ってしまう。多くの人々は、ためらわずその感情に身をゆだねる。それは、法

外な要望や不正な要求に対する誠実の勝利のようなものだ。それゆえ、彼らの野望と同時に彼らの恐怖心が大きくなるのに比例して、このように危険な状態に身を置く人々の策略はより巧妙さを増してきている。だが、彼らの策略はより寛大な気持ちでみられるべきである。というのは、善を願い悪を怖れるという人生における二つの大きな動機に、彼らは同時に突き動かされているからである。一方では誘惑され他方では恐怖を感じているので、判定を下す人間を尊敬していないにもかかわらず尊敬するかのごとくみせ、ここにもないお世辞をいって恩顧を勝ち取ろうとする人たちがいても驚くべきことではない。また、彼らはそれほど思っていないような弱点を自白して同情を買おうとするのだ。またこんな連中がいても不思議ではない。率直かつ寛大だとみせ、自分の欠点を大胆に公表し注目を集めたりして、世間のよい評判や称賛を獲得しようと努める連中だ。

高慢にもこれ見よがしに自分をみせびらかすのは、日刊新聞の文章を書く連中がよく逃げ込むやり方である。やっていることを弁明する際には、その思慮の足りない点を誠実さをもって補っているというかもしれない。そして、そんな文筆家は少なくともこう訴えるだろう。自慢することで、もし誰かがだまされて、彼らの文章をじっくり読んだとしても、その人たちからほんのわずかな時間をだましとったにすぎない。

「軍は戦い、一瞬にして、死かそれとも歓喜の勝利で戦いは終わる。」

「命を賭けたその挙げ句、二人のあいだの解決は双方の死のほかなかったのだ。」

(ホラティウス『諷刺詩』1巻7の13行、鈴木一郎訳)

その一日の功績に関わる問題はすぐに決着がつく。その文筆家が約束を破ったかどうかを確認するために、わたくしたちはフォリオ判半分を読む以上の仕事を強いられることはない。

短いエッセーを火曜日と土曜日に発行し、わが国の人々を楽しませようとするのには、いろいろな理由がある。短い理由の一つは、読んでもひょっとして喜んでいただけない方々に対して、せめて疲れさせないようにしたいと期待するからである。私の作品の美しさによって私が賞賛されないとしたら、作品が短いことで少なくとも赦しを請いたい。しかし、私の期待がほぼ赦しを請うことにあるのかそれとも称賛にあるのかを明らかにすることが必要だと、私は考えていない。というのは、傲慢になったり卑屈になったりする理由を両天秤にかけ正確に測ると、両者はほぼうまく釣り合いがとれていると私は思うからだ。とても釣り合いがとれているので、初めて執筆を試みようとして切に願う気持ちが強くなったとしても、私が両者の均衡をとるだけの余裕をずっともてるかで悩むことはないだろう。

この種の短いエッセーを出版するのにほぼ特有な多くの困難が伴うのは事実である。自信があろうが不安があろうが、当然のことながら出版それ自体によって筆者は得意に思うだろう。知識が広いとか想像力が活発だというので、すでにこの世の称賛を勝ち取ってい

ると自らが判断する人物は、自分の能力を喜んで見せる道を選択するものだ。その才能によって、彼は時をおかずして名声の呼び声を聞くことになるだろう。自分がいま書いているものが明日には感激をもって読まれているという話しが、とても多くの場所で聞かれると考えるだけで、気持ちは浮き浮きするだろう。短い作品の著者はこう考えてしばしば喜ぶことだろう。長い作品の著者は、仕事が完成する前に大衆の関心の対象が変わってしまうのではないかと不安な気持ちで書き進めなければならない。しかし、一つの話題に決して固執することのない作家は、話題をいろいろ変えて国民の趣味に合わせるかもしれないし、世間的支持の大きな風をつかみ、どこの方角から風が吹いているか把握するだろう。

また、注意深い人々の疑念を払拭したり、怯えやすい人の恐怖心を軽減できる見込みは少なくないように思われる。というのは、そういう人々にとって、それぞれのエッセーが短いというのは一つの強みであり励みである。膨大な計画のなかで似ても似つかぬ部分をうまく配置する能力に疑問を抱く人でも、複雑な構成のなかで自分を見失ってしまうのではないかと思う人でも、数頁だったら混乱することなくうまく調整できると期待するだろう。そして、自分の記憶の貯蔵庫をひっくりかえして調べ直し、そのわずかな貯蓄量では一冊の本にするには少なすぎることがわかったとしても、一編のエッセーを書き切るくらいなら充分である。その内容がわからないような実験的な事柄にとっても多くの時間を費やすことを怖れる人は、数日あれば自らの学識や才能から何が期待できるか明らかになると自分に言い聞かせるだろう。もし、自分の識別眼が十分に洗練されたものでないと思う人なら、本誌の毎号で述べられる所見に耳を傾けながら、自分自身の意見を修正していくのもよい。もしほとんど準備もなく扱いにくい主題で困ることがあったら、無知を自白することなく止めることだってできる。さほど危険でなくより簡単に取り組める他の話題に変えることだってできる。勤勉で技量があるにもかかわらず、自らがよい評価を得るに値しないとか好感を得られないとわかったら、すぐに当初の構想の旗を降ろし、皆さんや自分に危害を及ぼすことなく、撤退してもっと大きな喜びの得られる娯楽やより見込みのある学問に身を置くのもよい。

#### No. 4

虚構の作品を、いまの世代はこのうえなく喜ぶようだ。それは、人生の真の姿を如実に表わすからである。こんな作品は、この世に日常的に起こる事件によってのみその様相が変わる。また、人々との会話のなかに実際みられるような感情や雰囲気によって影響を受ける。

この種の書き物を恋愛喜劇と呼んでも不適切ではないかもしれないが、喜劇詩のきまり

にそってほぼ話しは進められる。その目指すところは、手軽な手段を用いて自然な出来事を持ちだし、驚嘆の力を借りることなく関心を持続させることである。それゆえ、英雄詩風の物語にあるような超自然の力や奇抜な道具立てを排除している。婚礼の席から新婦を強奪するような巨人を登場させることはできないし、囚われの身の女性を騎士が奪還することもない。登場人物を砂漠において惑わすことも、砂上の楼閣に人物を住ませることもできない。

スカリガーがポンタヌスについて述べたことばを私は覚えている。彼の作品すべてが同じイメージで溢れている。もし、ポンタヌスから彼がイメージするユリやバラを、半人半獣の森の神や仙人を奪い取ったら、彼の作品に詩と呼べるものは何も残らないだろう。同様に、前時代の作り話しから小さな村や森そして戦闘や難破の場面を取り除いたら、ほとんどすべての作品が消えてなくなってしまうだろう。

礼節と学識を備えた時代にこのように突飛な一連の空想がなぜ長いあいだ受け入れられてきたか、その理由を考えるのは容易ではない。しかし、その読者が確実にいる限り、作家たちが喜んでそれを書き続けたとしても不思議ではない。というのは、人が練習を重ねることばを駆使する能力がある程度身につけたら、自分の隠れ家に逃げ込み、作品をうみだす才能を解き放ち、容易に信じがたいことで頭を熱くさせる以上のことをしたいとは思わなかったからだ。このようにして、批判させる恐れもなく苦勞して調査することもなく著作は生みだされてきた。また、自然を知ることもなく、人生と向き合うこともなく本は書かれてきた。

私たちの時代の作家たちの執筆はまったく異なる。書物から得られる学識だけでなく、一人寂しく勤勉を重ねても決して得られない経験が不可欠である。しかし、そうした経験はふつうの場での会話や生きた世界をじっくり見つめることで培われるにちがいない。ホラティウスが「気ままでなければいほど、仕事が必要になってくる」(Epistles, 2: 1: 70)と表現したように、彼らの作品には気ままや放縦などほとんどないがゆえに、より多くの困難が伴う。彼らは、すべての人が知っているような原体験の描写に努めている。読者はだれでも、原体験との類似が正確かそれとも逸脱しているか確かめることができる。一方、ほかのもろもろの作品は、学識のあるものが悪意をもっていない限り、危険にさらされることはない。ところが、これらの作品は一人一人の一般読者からの批判の危険にさらされている。靴屋が歩いていた途中に大画家アペレスが描いた『海から上がるヴィーナス』の前でたまたま足を止め描き方の悪い履物を見つけその出来を責めたのと同じである。

人間の営みを単に写し取っているだけだとして認められないのではないかと作家は危惧する。ただし、そんな怖れは、この種の現代作家が目の前で感ずるにちがいない最重要の関心事ではない。これらの本は、主に若い人や無知な人や怠惰な人を対象に書かれている。

それらの本が彼らには行動の指針となり人生への導きとして働く。それらの本は、もろもろのことをまだ考えたことがないゆえに心が動かされやすい人々にとって心の抛り所となる。彼らは原理原則に縛られず、きまぐれな心の動きに身を任せがちである。経験から学んでいないので、その結果としてまちがった示唆や偏った解説を信じやすい。

最大の敬意が若者には払われるべきあり、不謹慎なことはいかなるものも彼らの目や耳には届かないようにすべきである。これは、思想の純正さにおいて決して目立っているとはいえない古代の作家が分別と美德をもって導きだした教訓である。同程度でないが同種の注意が、若者たちの目の前に横たわるすべてのものに払われるべきである。それは、正しくない偏見やひねくれた考えや不調和に混ざり合った発想から彼らを守るためである。

少し前に書かれた伝奇物語においては、すべての人間関係や感情が人々のあいだを行き交うあらゆるものからかけ離れていた。このため、読者がそれを自分にあてはめる危険などほとんどなかった。徳行も犯罪も同じくらい読者の行動範囲を超えるものだった。読者は、別の人種のように、英雄だけでなく裏切り者や救済者や迫害者にも一喜一憂した。これらの登場人物は彼ら独自の動機に基づいて自分の行動を決定したので、読者と共通する欠点も美点ももっていなかった。

しかし、冒険者がこの世の一般の人々と同列に並び、ありふれた劇のなかでほかのどんな人間でもおかれるような場面において振舞うのなら、若い観客はこれまで以上に目をこらして彼をみるだろう。また、彼が行動し成功するのをじっくりとみて、観客はこの世で同様の役割を将来果たすときには、自らが行くことをこれによって決めたいと思う。

この理由によって、これらのよく知られているお話しは、本職の道徳家しんげんが説く荘厳な説教よりもおそらくずっと有益だろう。そして、金言や箴言よりも効果的に美德や悪徳について熟知させるだろう。しかし、もし模範となる話しが強烈すぎてある種の曲解によって頭から離れないならば、また、意志がほとんど介入しなくても効果を生みだすならば、次の点に注意を払わなければならない。読者が自らの意志で選択する余地がない時には、最良の模範のみを示すべきである。そして、その模範がとて強く働く可能性がある場合には、その効果はあいまいであったり不確かであってはならない。

このような作り話しが実際の人生にまさる主たる利点は、その作家たちが自由に創作できることではなく、自由に対象を選べる点である。すなわち、多数の人間のなかから最も注目を浴びるにちがいない人物を選べる点である。例えていえば、ダイヤモンドのような人物である。ダイヤモンドを作ることはできないが、技術を尽くして磨くことによって、石ころのあいだで以前埋もれていた輝きを造り出し、それが輝く場所におくだろう。

芸術のもっとも優れた点は自然を模倣できることだと考えて、まったく差し支えない。しかし、自然には模倣にとてふさわしい部分があるので、それを選別する必要がある。

ところが、人生を表現するにはさらに多くの注意が要求される。なぜなら、人生は激情によって色あせることがしばしばあり、邪悪な気持ちによって形を変えることがあるからである。もし、この世が無秩序に乱雑に描かれていたら、その物語を読む効用として何がありうるか私にはわからない。また、人間に直接目を向けることが、すべてを無差別に映す鏡をみるのと同じくらいに安全だとなぜいえないのか私にはわからない。

それゆえ、人物を見た目のままに描いているだけでは、その人物像が十分に正しく描かれたことにはならない。というのは、決して描き切れるはずのない人物もたくさんいるからだ。また、一連の事件がこれまで見てきたことや経験してきたことに合致するからといって、その話しが人生の実像をきちんと物語っているとはいえない。というのは、この世の熟知を示す観察力は、人々を善良というよりも狡猾にする際によりしばしば発揮されるからである。これらの書き物の目的は、確かに、人間がいかなるものかを示すことだけでない。偶然による危険をより伴うことなく今後とも人間がみられるように心の準備をさせることでもある。狡猾な連中が敷き詰めた罠<sup>わな</sup>に無知な人々がひっかからないようにする方法を教えることである。その際に、背信者が彼の虚栄心<sup>こび</sup>に媚を売る時の優越感を期待する気持ちを持ちこんではならない。また、ペテン師に対抗できる力を与えることである。その際に、自らそれを試してみようという誘いにのってはならない。虚構のなかで若者たちを攻撃に遭遇させ、必要な防御の技術を若者たちに叩き込むことである。美德を汚すことなく抜け目のなさを倍増させることである。

自然に従うと称して、多くの作家が中心人物たちの性格付けにおいて良い特質と悪い特質とをごちゃ混ぜにしてしまう。それが度を超すと、両者が同じくらい目立ってしまう。私たちは連中の冒険のあいだ中ずっと喜んで彼らについてまわり、次第に興味をもち彼らに好意を示すように仕向けられる。連中は私たちが喜ぶことを妨げているわけでもないの<sup>さげす</sup>で、私たちはそのうちに連中が犯した過ちを蔑む気持ちをなくしてしまう。また、彼らだつて多くの長所を合わせもっているの<sup>さげす</sup>で、ひょっとしたら彼らを少しばかりやさしい気持ちで見つめることになるかもしれない。

実にすばらしく意地の悪い人間というものはこれまでもいた。奴らは自分の犯した罪に光を当てるような悪知恵をもっていた。そのため、いかなる極悪非道を行っても、奴らを完全に嫌悪することにはほとんどならなかった。それによって彼らのすばらしさの化けの皮が完全に剥がれることはなかったからだ。しかし、どの時代にもこの世を大いに腐敗させてきた連中はこんな状況で彼らの外見がそのまま守られるはずがない。苦痛なしで人を殺害する術が保持されることがないのと同じだ。

ある種の美点は、それと付随する欠点をもっているものだ。それゆえ、両者をそれぞれ別々に示すと、実際にありうる姿から逸脱することになる。この考えの帰結に応分の注意



を払うことなく、この考えを進めてきた人たちもいる。例えば、スウィフトは人間をこうみている。「人間は他人に憤慨すると同じくらい他人に感謝もする。」この原理は、同種の他の原理と同様に、人間は動物的な衝動から行動し対象を選ぶことなくある程度の性向を追及し偏りが生まれると想定する。なぜ、そう想定するのだろうか。感謝と憤慨が同じ感情の源から生まれることは認めなければならないとしても、理性が働くからといって、等しく同じ程度に両方の感情に身を任せることにはならないからである。その帰結が認められない限り、この賢明な金言は空言と化し、日常の行為や人生とは何ら関係がないものとなるだろう。

また、この二つの感情に対して最初にとるスタンスですら常に同じ距離にあるとは限らないことも明白である。というのは、誇り高い人々とはかく怒りっぽく、自尊心によって感謝の気持ちは損なわれるだろう。それは、感謝の念に含まれる劣等感を認めたくないからである。また、自分が恩恵を受けていると考えられない人が、恩義を認めたり恩義に報いることなどまったくありえないからだ。

このような人間の性向に関するもろもろの見解は、衆人の目にさらし議論を交わすべきである。人間にとってこれほど重要なことはない。その理由を示そう。人は善も悪も同じ源から生じていると考えるにもかかわらず、善のために悪を取っておき利用することもあるだろう。他人とはいわないが、少なくとも自分自身に関して判断を下す際に、人は自らの悪徳や欠点と比較して自分の徳や長所を評価しがちだろう。善と悪をごちゃ混ぜにするような人間はすべて、この致命的な過ちを犯すことになるだろう。そのような人間は善悪の境界線を引くのに力を貸すどころか、この二つをすばらしい技術をもってうまく混ぜ合わせる。このため、一般の人でそれらをうまく分離できるような人間などいない。

歴史的信憑性などまったく問題とならない物語の世界において、美德をもっとも完璧な姿で提示すべきではないとする理由など私にはみつからない。美德といっても、天使のごとき美德をいつているのではないし、この世にはありえない美德のことでもない。私たちは信じがたいものを決して模倣の対象としないからである。人間が到達し得るもっとも高いもっとも純粋な美德のことをいつているのだ。そんな美德は、事態を一変させるさまざまな苦難や試練の場で発揮される。時には災難を乗り越え、またある時には苦難を耐え忍ぶことによって、そんな至高の美德はわれわれに何が期待でき何が成し遂げられかを教えてくれる。悪徳は描く必要があるが、常に嫌悪を催すように描くべきだ。また、陽気という美点や勇氣という気高さを悪徳といっしょに描写すると、悪徳に親しみが湧いてしまうので、決して一緒に描くべきではない。悪徳がどの場面に現れようとも、それが実行された場合の激しい悪意によって常に憎しみを覚えさせなければならない。また、その企みの卑劣さによって軽蔑を感じさせなければならない。というのは、悪徳が才能や熱意を味方

につける限り、心から忌み嫌われることはないからだ。ローマの暴君は、実際には恐がられていただけにもかかわらず、嫌われることに満足をおぼえていた。機知に富む人物だと認められたとしても、進んで意地悪だと思われることを好む恋愛小説の読者は数千人もいる。それゆえに、たえずこう教え諭すべである。美德は物事を最もよく理解している証であり、偉大さを築く唯一の確固たる基礎である。一方、悪徳は偏狭な考えの当然の帰結であり、過ちにはじまり恥ずべき不名誉な行為で終わる。

## No. 36

田園詩にも勝<sup>まさ</sup>って、多くの読者を魅了し多くの作家のこころを掻きたてる種類の詩はほとんどない。この詩はあまねく心地よいものである。なぜなら、ほとんどすべての心象に馴染み深い光景が写しだされ、それによって人々を楽しませるからである。また、その光景がうまく描写されているかの判断を、すべての人々が同じようにつけられるからである。私たちが心の安らぎやゆとりや無垢を習慣的に連想させるような生活が、そこには描かれている。それゆえ、そのイメージや心象がこころに入り込めるように、私たちは容易にこころを開く。それによって、不安や動揺が払拭される。私たちは至福の地に送られることを何のこだわりもなく容認する。その地で私たちが出会うものは、喜びや豊かさや満足だけである。風はことごとくかすかな喜びの声をあげ、木陰はすべて平穏を約束する。

わかってもないことを話したがる人々のなかに、田園詩こそ最も古くからある詩歌だと主張してきた人もいる。実際、詩そのものが理性ある人間と同じくらい古くから存在することは確実だろう。そして、最古の人間の生活は農村での生活であったことも確かなので、私たちがこんな推測をするのは理にかなっているだろう。彼らの発想は必然的によく精通している事柄から借用されてきた。このため、彼らが書き綴ったものには、最古の観察者の目の前で起こったにちがいない創造についての思いが全体に満ち溢れている。そして、それが田園の賛歌となった。無垢な時代に創造者を讃えるのに、ミルトンは二人が互いに歌いかける原始の方式を導入したが、田園詩はその形式に似ている。

田園詩において人間の想像力が初めて発揮された。それと同じ理由によって、詩は一般的には私たちの精神が楽しんだ最初の文学である。私たちは目を見開きこの世を見始めて以来ずっと草原や牧草地や森林をみてきた。そして、人間としての行動や感情と関わるようになったときよりもかなり前から、私たちは鳥や川や風に触れ楽しんできた。だからこそ、私たちは田舎の風景をみて喜ぶのだ。私たちは、その元々の姿をよく知っているからである。その原初の姿は、私たちが決してみることのなかった宮廷の描写や決して感じなかった感情の表現によって好奇心が呼び覚まされることなどほとんどなかった時代のもの

である。

このような読み物によって得られる満足感は、幼い時代から始まりその後ずっと長く続く。たとえ知的な世界に進みそこに入っても、私たちはその満足感を他の子供っぽい遊びや戯れのなかに放り込むことなどしない。それどころか、怠惰に暮したり気をゆるしているときにはいつでも、喜んでそこに戻ろうとする。本物の田園詩が描く心象は、常に私たちの喜びを掻きたてる力をもっている。なぜなら、自然が生み出したものからそのイメージは導き出されているので、その創造物は常に同じ秩序と美を有していて、私たちの考えに強い刺激を与え続けているからである。それは、この上なく不注意に周りをみている人々にとってさえ明らかであると同時に、この上なく強い理性の持ち主やきわめて厳密に思考しようとする人々にとっても充分以上のものがある。この世の騒々しく無秩序な様相に長いあいだ接してきたからといって、静寂や静謐を期待する私たちの性向が、とても弱まることはめったにない。子供の頃、私たちは喜びの場としてその思いを田舎に向けてきた。年を取ると、休息の場所として田舎に思いをはせる。おそらく偶然で副次的な喜びを感じながら思いだしただろう。その喜びとは、すべての人が若い頃の楽しみを生み出した場所や出来事を思い起こしたり振り返ったりするときに感ずるものである。そして、その喜びによって、この世が珍しい花の開花で陽気になり、彼の横では幸福が寄り添って歩き、希望が彼の前ではじけ出た人生の絶頂期に彼は引き戻される。

このどこにでもある喜びの感覚によって「数なき数の人々」が誘われ、技を發揮して田園生活を描写しようとした。彼らは他の模倣者の方式をまね、いくつかの同じ心象を次々と同じように結びつけ伝えることにおおむね成功してきた。そして、ついには一編の詩のタイトルを読んだだけで、作品全体のつながりを推測できるようになった。ところが、数千にも及ぶこの種の詩作を読み通したあとでも、これまで創られたことのないような一つの自然の光景によって自らの知識が大きく広がったと気づくことはないだろう。また、これらの景色を新たな道徳的な目的に利用したからといって、それによって想像力が掻きたてられることもないだろう。

田園詩の範囲は実に狭い。というのは、自然そのものは学問的に考察するならば尽きるところがないが、人間の目や耳に対するその一般的な影響は不変かつ均一で、きわめて多様な表現が不可能だからである。詩歌が一つの種を他と区別するような細かい差異について語ると、想像力を充たす壮麗な単純さから必ず逸脱することになる。また、詩が物の隠れた特質を分解し始めると、詩本来の姿を思い起してもわかるように、詩はすべての人々のところを満足させる普遍的な力を必ず失ってしまう。しかしながら、それぞれの時代に何らかの発見がなされ、また、それらの発見が徐々に広く一般に知られるにつれ、また、新しい植物や新たな文化様式が導入されそれが少しずつ一般的になるに従い、田園詩は

時々少しずつ修正され、百年に一度は幾分変わった景色を呈すことがあるかもしれない。

しかし、牧歌的テーマは、他のものと同じように、それらに彩りを添える資格のない人々の手にしばしば渡ってきた。彼らは、自然全体をほとんど知らず、自分自身の想像力のみにかかせて自然を描いたり、自然の様相を変化させたり歪めたりしてきた。その結果、彼らが描く自然の姿は、先人たちが描いたものをそのまま書き写したよりも多少ましに見える程度だった。

田園生活の心象だけでなく、心象を適切に生み出すことができる場面もありふれていてその数は少ない。田舎での作業や喜びにのみ閉じこもっている人の状況も、それほど大きな差があるわけではない。また、もっと複雑なやりとりにおいてなら、困惑や恐怖や驚愕を引き起こすような出来事に、そんな人はほとんどさらされることがない。その結果、好奇心を引くような状況のなかで彼の姿をみる可能性は本当にめったにしかない。彼の大望に抜け目のなさなどないし、彼の愛情には策略などない。彼は、自分のライバルに対して、自分よりもお金持ちだという以外に不平はない。また、残忍な女領主だとかひどい収穫だという以外に嘆くような悲慘にもあっていない。

喜びの新たな源泉が必要なことを確信していたので、サナザリウスはその景色を草原から海洋へと移し、羊飼いを漁師に替え、自分の考えを漁師の生活から導き出そうとした。その点、彼はその後の批評家たちから責められてきた。なぜなら、海は恐怖の対象で、こころを癒したり激情を安らかに休ませる場所としては決して相応しくないからだ。この批判に対して、これまでに確立した金言によって彼は守られているかもしれない。詩人は自分の描く心象を選択する権利をもっている。浸水した土地を見せる必要がないように、嵐の状態の海も見せる義務など詩人にはない。詩人は海の喜びをすべて描き切っても、海に潜むものもろの危険は隠すだろう。田園詩人は羊飼いをブナの木陰の下に描くが、決して羊飼いに悪感を感じさせることはないし、野生の動物が彼を襲う姿など描かないのと同じである。

しかしながら、漁村をテーマとする詩には、おそらく埋め合わせできない二つの欠点がある。暑い国々では、サナザリウスのように海岸に住む人にとって、海は喜びと慰めの場所と見られている。ところが、海は陸よりもずっと変化が少ない。それゆえ、描写の上手な作家にとってさえ、海はその題材がすぐに尽きてしまうだろう。かつて、そんな詩人は太陽が海から昇ったり沈んだりするのを描き、春のそよ風に波がゆれ、海水が海岸にざざ波となり幾度も押し寄せ、浅瀬を釣りの絶好の場所として描いてきた。そんな詩人には、同種の他のすべての詩歌と共通のもの以外に何も残らない。ニンフが溺れた恋人のためにいう泣き言、採った牡蠣<sup>かき</sup>をマイコンは受け取ったのに他の人々は拒否したことに対する漁師たちの怒り、そんなこと以外には何もないのだ。

この種の詩歌を広く一般の人々が受け入れるのに、もう一つ障碍がある。かなり多くの人々が海での喜びを感じながらいつも生活しているにちがいないが、人々はこの喜びを全く自覚していないことだ。あらゆる地域の内陸に住むすべての人にとって、海は水面が限りなく広がったものとしてしか知られていない。その海を越え人間は他の国へ渡るが、海のなかではしばしば生活がみえない。それゆえ、彼ら自身の頭のなかでは、くねって曲がる海岸線や穏やかな湾は描かれるが、その実態を確認する術がまったくない。また、彼らが描かれる詩を、彼らは地理学者ディオニシウスのきちんとした地図や海図をみるのとは違った心境で眺めることはできない。

自然が創りだした作品に広く慣れ親しんでいる読者に対して教養ある言語で書いたがために、サナザリウスはこの欠点を感知できなかった。しかし、もし彼が俗っぽいことばで書くことを試みたら、それを愛してもらおう努力がいかに無駄なものだったかすぐにわかっただろう。実際には、そのことはきちんとして理解されていなかった。

残念ながら、太古の田園詩を大幅に追加したり改変したりして、それをよりよくする試みが容易でないとわかるだろう。私たちの自然描写は古代ローマの詩人ベルギリウスのものとはまったく異なるだろう。それは、イングランドの夏がイタリアの夏と異なるのと同じである。また、現代の生活がいくつかの点において古代の生活と異なるのと同じである。しかし、両方の国において自然はほとんど同じである。そして、詩歌は変動する習慣というよりも人間の不変の情緒を扱うので、時間と場所の違いによって生み出される相違点など重要ではないだろう。次の号で、近年において田園に関する思索がどれほど進んでいないかを私は示すつもりである。

## No. 40

著述家はとても怒りっぽい人種だとこれまでいわれてきた。さらに、彼らはほんのわずかな批判をくらっても、この上なくやさしく謙虚な気持ちからでた助言や知識をもらっただけでも腹をたて、自分が短気だということをほとんどいつも表に出してしまうといわれてきた。

著述家たちはお互いとても親密なつきあいがあり、このような気質は学問をする人々のあいだに広まっていると説明してきた。もし彼らが世の中をもっと広く眺めていたら、この気質はすべての人間の特質に散見され、称賛を求めるあらゆる種類の大望や願望と混ざり合っていることを彼らもしっただろう。さらに、その気質の影響は、多少控えめにかつ大なり小なり狡猾な偽装をこらし、どんな場所でもどんな状況でも現れることがわかっただろう。

文筆家間のけんかは他の人たちよりも実によく観察される。なぜなら、彼らは必然的に一般大衆の判断に訴えかけ、けんかをしているからである。彼らの敵意は自分の陣営から拍手喝采をもらうことによって触発され、一般の人々の気晴らしのためという狡猾な激励を受け、その敵意は長く続くことになる。能力や学識のある人々のあいだで勃発した争いがたまたま熱を帯びたときには、最初に激昂したのとまったく同じ理由によって、争いの記憶はずっと続く。なぜなら、その争いで読者の悪意や詮索心は満たされ、読者はそれを慰め事としそれを嘲笑することで人生の空虚を埋めようとするからである。それゆえ、知力において競争しているもの同士の個人的な争いが、時には後世にまで持ち越されることがある。その場合、それほど目立たない子孫たちの妬みや嫉妬は、けんかの張本人たちと同じくらい辛い気持ちで引き継がれ、より大きな悪を生みかねない。しかし、その妬みはその影響がわずかに及ぶ人々にのみ知られ、人生の何気ないふつうの営みのなかで通り過ぎ忘れ去られることになる。

失敗や愚行が露見したことで生ずる怒りは、私たちの誇りとある程度比例しているにちがいない。そして、自尊心が行動の原理と直結していればいるほど、怒りは決まってより辛辣なものとなるだろう。それゆえ、私たちが秀でていると想像したがっている点がいかなるものであれ、名声に対する要求が疑問視されると、私たちはいつも不快になるだろう。その場合、もし業績による名声が褒賞をもってしか期待できないようなものとみなされたら、私たちはもっと不愉快に思い怒りをこらえきれなくなるだろう。この理由によって、自らの品行に関わる非難のことばにかなり我慢して耐えてきた人々でも、自分の知性を汚すようなことを<sup>ほの</sup>仄めかされただけでも激昂するのはふつうのことである。そして、女性に関しては、美貌がないと責めることほど深い傷を残す非難はないし、その非難ほど長く心に残るものはないことはよく知られている。

しばしば人はつまらないことを追い求め、それで自分の想像力を満たし、大して重要でもないようなことでこの上なく喜んだりする。このため、不運な非難によって悪意が引き起こされ、それがとても激しいものとなり長く続くのを私はこれまでしばしばみてきた。もし、その非難によってとても傷つきやすい部分が傷つけられることがたまたまなかったら、その非難が浴びせられたとしても何の影響もなかっただろう。ガスツルスは長男に遺産を譲渡しなかった。彼は自分のことを味のわかる人間だと評価していた。ところが、彼が当時推奨していたワインと同じものを、その前日には飲むに適さないとして彼が遠くに送ったと、息子が親に話したのである。プロクルスのいるところで、彼の甥がマリウスの優雅な馬術をたまたま誉めた。その甥というのは、その時代において最も有望な才能の持ち主だと彼が常々考えていた人物だったが、このことでこれまで彼がみせていた優しい態度を甥に示さなくなった。また、フォルツニオが英国枢密顧問官だったころ、彼はその職

で技能および勤勉さにおいて卓越していた一人の事務員を官職の一つからはずさせた。職を解いた理由は、フォルツニオに逆らってお金をかけるほどビリヤードの技量にすぐれた男が王国にはもう一人いると、その事務員が語るのを聞いたからである。

フェリシアもフロレッタも一つ家に育ち、幼少期の喜びや愛情すべてを共有してきた。彼女たちは同じ時に人生に船出し、その後も信頼と友情を育んできた。ドレスを変える時にはいつもお互いに意見を交わし、新しく恋人ができると告白し相談しあった。二人がたまたま一緒にいたときにはいつでも、どんな気晴らしもそれだけで一層楽しいと思えた。そして、離れているときには、お互いの行動を認め合いお互いのすばらしさを讃えた。彼女たちはこんなふうにとても親密だったし強い信頼関係にあった。ただし、これも誕生日が近づくまでのことだった。ある朝、彼女らが新しい服について相談していたとき、フロレッタは友達フェリシアに舞踏会では踊らないようにと思い切って忠告した。さらに、一昨年の彼女の演技は、彼女のこれまでの踊りでの業績によって培われてきた期待に応えるものではなかったと彼女に伝えた。フェリシアは彼女の真摯なこころをほめたたえ、また彼女の忠告に感謝した。しかし、彼女は答えた。「私は自分を満足させるために踊っています。だから、人が思いつくままに何をいおうと私はほとんど関心がありません。もし私の現れるのがあなたに不安を与えるようでしたら、私はその場に近づきません。」その時、フロレッタはあらためて自分の真剣さと愛情を強調する以外に何もいうことはなかった。フェリシアはフロレッタのことばにとても満足していたので、ふつうの愛情以上の感情をもって二人は別れた。お互いの訪問はなおも続いていた。ただし、この点だけがそれまでとはちがっていた。フェリシアは以前にもまして時間をきちんと守り、しばしばこう言い切った。彼女が誠実さにとても高い価値をおいていること、友達に過ちを敢えて諭すような善行は尊重されるべきだと強く思っていること、忠告がひよつとした間違いからでたとしても忠告は強い感謝の気持ちで受け取られるべきこと、などである。

数カ月してから、フェリシアはとても真面目な顔でフロレッタにこういった。「あなたは美貌のおかげで、あなたが行うあらゆることに魅力が増しています。そして、あなたの適正はとても広範囲に及ぶので、優れたいかなる試みにもあなたは失敗することはないでしょう。でも、私は友達の義務としてあなたにこう伝えなければなりません。もしあなたが判断力がないことをずっと隠していたとしたら、それは歌う誘惑にしばしば負けたということです。というのは、あなたのマナーには上品でないところがありますし、あなたの声の音域はまったく広くありません。」なるほどフロレッタがいうように、「三日前の夜にスプライトリー夫人のお宅で私が歌ったとき、私は風邪で喉ががらがらでした。でも、私は自己満足のために歌っています。私が好かれているかどうかまったく気にかけていません。しかし、そんなことがあっても私が愛するフェリシアの優しさはかわりません。私に

は真の友達がいて自分はいつも幸せだと思っています。」

この時から、彼女たちは会うと必ずお互いに敬意のことばを述べ信頼を表明した。しかし、その後すぐに二人は親戚のもとを訪ねるといので、田舎にいった。戻ってくると、新しい知人がしつこくいうので、二人はそれぞれ町の異なった地区に居を構えるようになってしまった。そして二人が会ったときには、しばしば自分たちがかなり離れた場所にいると嘆き、相手が気楽な気持ちでやっているかわからず不安な経験をしていると嘆き悲しんだ。

このように、最も親しく最も固い友情も、素直さと誠実さによって崩壊することがある。私たちが素直で誠実であろうとすると、私たちは自分を称賛し喜ぶことはできなくなり、正すよりも甘えがちな私たちの欠点を私たちは思い出すことになる。

忠告されて怒る人間は、自分の欠点をこれまでしることがなく、助言を誤って攻撃とみなしこれに憤慨する。こう想像するのは決して必然的なことではない。というのは、私たちが自己の罪悪をおそらく最も強く自覚しているときにこそ、いわれると青筋をたてて怒るのはきわめて自然だからだ。私たち自身の性格を簡単に弁護できるあいだは、私たちは責められてもそれでうらたえることはまったくない。それは、私たちが必ず勝てる敵の襲来に遭ったとしても、まったく驚かないのと同じである。このような敵の襲撃はいささかの危険もなく、かえって私たちに名誉をもたらすだろう。しかしながら、人というのは、友人の非難が自分の気持ちとぴったり合っていると感ずるときこそ、すぐに感情を荒立て恨みの情や復讐の気持ちをもちがちである。その理由は二つのうちどちらかである。その一つは、彼が自覚している欠点が他の人たちの目を逃れてきたと期待したり、友達が情状酌量のところでやさしく欠点をながめ彼のほかのいろいろな美德に免じてその欠点を不問に付したと期待したり、また、友人が彼のことをとても賢いと考え忠告など必要ないと思ったり非常に繊細なので非難に耐えられないと考えていると期待したからである。もう一つの理由は、眠らせておこうと努力してきた思いが呼び覚まされると、それに伴い必ず苦痛を感じ、その苦痛が怒りを生むからである。その際、そんなことは自分ではなく他の人たちに起こるべきだと、ここから思わない者がいるだろうか。

真面目な直言によって生ずる怒りは、その直接の原因がいかなるものであっても、確実に起こり概して激しい。このため、直言の義務を果たすに十分なだけの度量をもつ人はほとんどいない。その義務の履行は、ほかのほとんどの義務以上に、それを忠実に果たそうとする人々を困難な状況に追い込み苦悩をもたらす。しかし、そのような義務を果たそうとしない友情など、ほとんど価値のないものである。なぜなら、このような極めて親密な関係がとても意味があるのは、お互いの徳が守られまた奨励されるからである。また、お互いの悪い点が初めて現れたとき、それをタイミングよくみつけれれば、健全な諫め



ことばによってそれはうまく抑えられるからである。

天の定めによると、真に価値あるものは現状のままでは何も獲得できない。常に困難と危険が伴う。はばかりことなく気持ちを相手に伝えることで利益が得られると期待する人は、不愉快な事実を語ることで自らがそれに値したいと願っている友情を危険にさらすこともあるにちがいない。この危険な友情の成就において守らなければならない中刻的原则は、友情に利害や虚栄心をまったく持ち込むことなく友情を純粹なまま保つことである。すなわち、良心が私たちにこう囁くときには、忠告や助言を控えることである。欠点を正そうと期待しているのではなく自分の明敏さを示したいとか、相手に恥をかかせることによって自尊心を満足させようと考えてそうしたいと思っているのではないか。実際、最も繊細な注意力を備えた人でも、相手に対してその人の欠点を知らしめる適切なタイミングをうまくみつけれられるかは必ずしも明確でない。また、最も熱い善意のころをもった人でも、それを欠点と判定した判断基準を相手に納得させられるか不確かだ。しかし、戒める相手の幸せだけを一重に望む人は常に、相手から親切にされて満足するか、その親切な行為に自分が値すると考え満足を得るかのどちらかだろう。うまくゆけば、その人は友人に利益を施すことになる。もし失敗したら、ただうまくやろうと心を痛めたと少なくとも意識するのだ。

## No. 64

ソクラテスがアテネの町に自分の家を建てていたとき、その規模が小さいのをみた人が彼に問い質した。「先生のように卓越した方が、その威厳にふさわしいもっと立派な建物をどうして建てられないのですか。」ソクラテスはこう答えた。「本当の友人がきて一杯になるには、この狭い家で十分に収容できると私は考えている。」友情の名に恥じないようなところの一致はきわめて稀なので、人生哲学の大家の意見はこんなものである。虚栄心や好奇心、礼儀や尊敬の感情をもって彼の周りに集まる多くの連中のなかから、心からのやさしきで彼をみる人や変わらぬ忠誠心で彼に仕える者を選び出し、彼らをすべて受け入れるのにそれほど広い住居が必要だと彼は思わなかった。

友情が成立するには、実に多くの特質が必要である。また、友情はたくさんの偶発的な出来事によって生まれたり続いたりする。このため、人々の多くは友人がいなくとも満足し、できることなら利益と独立をもって友人がいなくとも穴埋めとする。

大多数の群衆は、温かい気持ちで変わることなく好意を相互に交わすのに不適格な連中である。それは、ほかの高尚な美德を何か身につけようと彼らは思わないからだ。連中はいつも自分の利害にだけ関心がゆき、自分の感情に抵抗できず盲従するのである。長く同

じ習慣を続けていると、どんな欲望も拒否できなくなるだろう。あるいはまた、何であれ目の前に満足のゆくものがあるなら、そのしつこい要請に対して一層高尚な動機をもってしても断ることができないだろう。そして、頑迷な利己主義者は、一切の利益はそれとともに共有する度合いが高くなるに従って、利益はどんどん減っていくと想像するだろう。

しかし、この憎むべき頑迷な退廃した心の持ち主だけでなく、ふつう程度の美德となら違和感のない種々雑多な気質をもっている人たちも、友情を自分のこころの底から排除してしまうこともあるかもしれない。善意という点では十分に熱心だが、従順さや寛容さに欠けた人もいるだろう。そういう人々は気が変わりやすく不安定で、すぐに新しい対象に目を向け、怒るのではなくうんざりし、敵意をもつことなく疎遠になってしまう。また一方では、優柔不断で軟弱な人々もいる。彼らは評判やうわさに簡単に左右され、疑わしい状況があるとすぐに警戒心を働かせ、お世辞や嫉妬から導かれる疑惑の声にはことごとく耳を傾け、すべての自信ある助言者の意見にはすぐに従い、最後の一瞬には湧きでる衝動で動こうとする。さらに、対立に耐えられない人たちもいる。彼らはほかの賢い人の判断に身を委ねより安全でよりよい道を歩こうとはせず、むしろ、自分の判断によって間違った道を進むことに甘んずる。彼らは忠告を侮辱とみなし、質疑を自信のなさ<sup>と</sup>みなしながら、完全に屈服し黙って服従するような人間関係だけに関心を寄せがちである。さらに、良い意図も悪い意図も同じように注意深く隠そうとする腹黒く複雑な性格の連中もいる。彼らは、目に見えない手段によって結果を生みだし、計画が実現した段階でのみ計画を示して喜ぶ。また、ある連中は、万人の目に同様に自らをさらし、幅広く区別することなく話を<sup>すべ</sup>にする。彼らは慎重な誠実さを押し通す正直な術をもちあわせ<sup>すべ</sup>に必要な警戒心もなく、自分の秘密だけでなく他人の秘密も同じようにしゃべりまくり、ともすれば悪意なく人を責めたり、裏切ることはないがすぐにだましたりする。これまで述べてきた人々のいずれも社会にとっては有益かもしれないし、善良な意志と墮落していない道徳心で評判となりこの世を渡り歩いているかもしれない。しかしながら、こんな人たちは親密で友愛にみちた親交を結ぶには不適切である。その親切心が自分の身体の熱から出ているだけで、中傷のあおりを初めて受けただけで熱が冷め凍ってしまうような人物は、友達として適切に選ばれることなどありえない。自分の意見以外に誰の意見も聞こうとしないような人は、有益な忠告者には決してなりえない。その人の中心となる処世訓がすべてを疑うことであるような人物は大きな信頼を得ることはないだろう。また、人々すべてに両腕を広げ、それぞれの人を分け隔てなく自分のこころに住む人だとするような人間は、その誠実さや素直さが大いに尊重されることなどありえない。

友情が好意に満ち同時に長く続くためには、それぞれが同程度の徳をもっていなければならないだけでなく、同じ種類の徳でなければならない。両者によって同じ目標が提起さ

れるだけでなく、同じ手段が確認されなければならない。私たちは軽佻浮薄な教養とその場しのぎの愛情に促され、自分が尊敬できない人物を愛するような気分させられることがしばしばある。また、往々にして偉大な才能や徳行の明らかに正しい証拠に突き動かされ、自分が愛することができないような人々を尊敬することを余儀なくさせられることもある。しかし、友情とは尊敬と愛情とが混ざり合ったもので、後者からそのやさしさが派生し、前者からその久しさが生まれる。それゆえ、友情を得たいと思う者は判断力だけでなく、好意を引き寄せる力をもたなければならない。彼らは困った日には毅然きぜんとしなければならないし、楽しい時には快活でなければならない。彼らは緊急時に有益だというだけでなく、日常生活においては愉快であることが必要である。友人がいることで勇氣と快活が得られ、同時に恐怖と憂鬱の影が振り払われなければならない。

友達同士が満足するためには、概して意見の一致が不可欠である。政治において政党を分け宗教において宗派を区別し、多少は一般的な生活に日々影響を及ぼすような、目立った行動原理において双方の意見の一致が少なくとも必要である。というのは、反対の党派に属する人とのあいだに、立派な親交関係が続いていたのは恐らく知られていることだろう。このような友人関係は模範というよりもむしろ驚嘆の例として示されるべきである。しかし、このような例によって私たちの行動を決定するのは適当でない。それは、崖から落ちて死ぬことなく生還する者がいたとしても、崖から飛び降りるのはよくないのと同じである。

公的な対立関係にありながら私的にやさしいところを持ち続けることはきわめて困難なことにならざるをえない。このような対立関係のなかで必然的に幾多の出来事が起こり、その影響は個人の会話や生活にも及ぶこともあるだろう。道徳上または宗教上の動機に動かされ反対の党派や宗派くみに与する人々は、一般的に異なった目ですべての人を見て、ほとんどすべての問題を違った主義に照らして決定するだろう。このため、このような論争が起こったときに、事態に順応するには、自分の主義を欺き、友情に値することを止めながら友情をなおも維持することになる。このような場合に黙っているのは、自立していることに伴う幸福と威厳を失うことであり、また、変わらぬ抑圧のもとで生活し、友達を騙すだまとまでゆかなくとも彼を見捨てることである。二人とも自分は間違っていないと信じ、ともに事の重大性について公言する場合、二人の友人のうちどちらが屈服すると誰が決められようか。そうなると、残された道は衝突や論争のみである。こうなったら、そこから一体全体何が期待できるというのだ。辛辣で激しいことばのやりとりだけだ。そして、勝者は傲慢となり敗者は苛立ち、まもなく論争に疲れ、お互いへの好意は完全に消滅することとなるだけだ。相互の幸福を祈ることばのやりとりや礼儀正しいところの行き来が実際に続くことはあるかもしれない。それは樹の根が傷つけられたとしても、大枝はなおしば

らく緑の葉をつけているのと同じである。すでに不和の毒剤が注入され、顔には今なお微笑が保たれているかもしれないが、ここは頑なになりひどい病にかかっているのだ。

真面目で厳しいときの姿だけを私たちがみているのであれば、そんな人間が長いあいだ愛想がよいということはないだろう。だから、善行のやさしさや清らかさを維持したいと思うのであれば、友人はともに相互の悩みだけでなく喜びも共有することが必要である。また、趣味が同じで、同じ遊びに興ずる必要があるだろう。しかしながら、このことは主義の一致と同じように必須の要件と考えるべきではない。なぜなら、その昔、ローマの大詩人ホメロスの教訓がいうように、だれでも他人を喜ばせるために自分の趣向を満足させることを本気で諦めるからだ。確かに、友情は喜びを犠牲にするだけの価値が十分にあるかもしれない。ただし、良心を犠牲にするだけの価値はない。

ある画家がかつて私にこう告白した。絵画の大家のなかではこれまでお互いに愛情を温めあうことなどなかったというのだ。この表明は人生の経験に照らしてもまったく正しいもので、学べば学ぶほどお互いが競争になるような間柄では、温かい変わらぬ友情を築こうとする期待をそぐことになる。彼らのあいだでは、愛顧者も批判者もことごとくお互いを絶えず挑発することになる。そうすると、経験によって私たちに許される究極の期待は、同じ分野の者たちは人前で公然と敵対しあい隠れて排斥するのを慎むべきだということだ。そうすれば、同業者全体として攻撃を受けたときには、一致団結し共通の敵にあたることができるだろう。しかしながら、世の中には、その数は少ないが、妬みによる競争心も寛大さを圧倒することのなかった人々もいないわけではない。彼らは名誉心よりも高尚な動機をもって下級の人間と一線を画し、傲慢の風や利害の塵に打ち勝って友情の聖なる火を消さないでおられる人たちである。

友情は同レベルの者のあいだでなければ、長続きすることはまれである。同じレベルの者なら、一方の人間のすぐれた点が他方のそれに匹敵する長所によって弱められる。報われない恩恵や返されない義務は、通例、親愛の情を増すものとは認められない。実際に、恩恵や義務は感謝のこころを引き起こし、かつ尊敬心を高める。しかし、それらによって親交関係にみられる気安さや心安さは奪われてしまう。よって、このような気安さがないならば、忠誠、熱意、感嘆などはあっても、友情は絶対に成立しえない。このように、この世の授かりものはすべて完全とはいえない。友情の大きな効果は善行のこころである。しかし、めったにやらないような親切なことを初めて行ったりすると、友情が危なくなることがある。実を結んだ植物が枯れるのに似ている。しかし、このように考え、気前のよさを抑えたり慈悲のこころを抑制すべきではない。というのは、義務は便宜よりも尊とばれるべきであり、寛大なことによって友情の喜びを一部失う人は、その代わり自らの良心の祝福を得るはずだからだ。